

槐

かい

岡井省二創刊

平成20年6月号

平成二十年六月一日発行 第十八巻第六号 通巻第二〇四号（毎月一回一日発行）
平成二年九月十八日第三種郵便物認可



恩
愛

高橋将夫

凧の身になり考へる風の向き
鬪牛のぶつかる音の朧かな
若竹や初球から来る変化球
春の潮寄せてみなぎる気魄かな

誕生も死もみな春の土の中
逃げ水を追つてかの世に来てしまふ
桔梗の芽阿修羅の生まれ変はりなり
もう一つおまけと亀の鳴きにけり
佐保姫の帯をはらりと黄八丈
恩愛のまだ残りたる古巢かな
現実と夢の境の薄氷

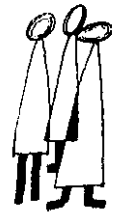
槐安集

水野恒彦

日にさときかがひ耀歌の山の笑ひけり
鳥雲に物書くことをつつしみて
棺ひとつ春野の端に葬らる
弥生とは濃やかな月墨を磨る
蕨長くよもつひらさかあたりかな

延広禎一

哲人の顔して菊の根分かな
トランペット聞ゆる日和蕨巻く
薬や胸板厚き赤不動
花守の雪花菜食しをる日和かな
春慶の盆に猿ぼぼ桜山



加藤みき

鳥曇窓いつぱいに象頭山
絵馬堂にマーメイド号かぎろへり
一束の蕨に灰を作りをる
水の上を水さばしれり荻若葉
わが性しやうはここにありけり榊伐

石脇みはる

春臯すかさず首を回しけり
最澄の山に一礼鳥曇
つれのうて蕨の山に入りけり
をだまきは紫がよし浄瑠璃寺
大宇陀に翁と出会ふ朧かな

中島陽華

追ひかける般若波羅蜜多さくらかな
公園のピエロの涙シャボン玉
鬼瓦降ろしてありし鳥の恋
春水や天神さんは核の中
桃割れを結びしことあり萩芽吹く

竹内悦子

啓蟄や地下鉄を出て迷ひける
揚ひばり隕石に穴あまたかな
さくら満月力を抜いてをりにけり
菜の花や石仏の首のびてをる
山桜峽に杖つく尉と姥

栗栖恵通子

夫の背にさくらまだかと描いてみる
ほうほうと野焼きに追はれ影法師
帯解けば胸のしめりや花衣
野晒しの眼の中の初さくら
地獄変の炎の及びたるさくらかな

大島翠木

末黒葦の雨や市川崑の逝く
春灯や肉屋の肉の間のあひ鉤
鳥獸戯画日永の壺のくびれかな
銀紙の紙風船の口なりき
夜桜や動くと思ふゴヤの裸婦

雨村敏子

春の川いくつも渡り産土へ
きつねだなゆらゆら揺るる絵空事
引く波の忘れてゆきし春の月
磯の香や父の記憶と寶貝
春夕べもの燃やしたる跡けぶる

小形さとる

寝て食うて五柳先生畑を焼く
のつぺりと朝日のぼるや豆の花
糸遊に目鼻付けたる男にて
犬吠えて水子ながれて花の山
羊蹄や人の千年変わりなし

本多俊子

死ぬまでは海月生きねばならぬなり
呼子鳥タイの絹地をひろげをり
ももいろの土竜の子われ春帽子
きさらぎに紅絹もてふくや蒔絵つぼ
仙厓の○と□よ春深し

天野きく江

漂泊の黄砂なれ繋がる地表
駘蕩や光の糸に操らる
総立ちの目線平らに海市かな
くちづけのあとの唇草朧
八十八夜松の匂ひをまわし呑む

槐市集

宇田喜美栄

露味嘈やわたしの中に祖母の声
啓蟄や叡山に臺大急ぎ
玉霰風のリズムで踊りだす
風花の美しきを背に峠越
軒雫春の深空の動かざる

大山里

野に山に風のいそぐも春だから
青頸がとんだぞ橋の名残り石
剪定の腰に尺八ぶらさげて
約束の海を間近のさくらかな
紅椿一方ばかり咲かせをり

加藤富美子

しづかなる春の渚の忘れ貝
春光をくるりと掴む鉤くづ
老鶯は森の静寂ゆさぶりぬ
白髪やたんぽぽの絮いとほしむ
竹皮を脱ぐに月影さしむたり

金澤明子

花の城堀にボートの男の子ども
老女どち防火訓練おぼろおぼろ
一尺の梅の小鉢の花くれなる
啓蟄に数歩越されて吾が頭
折りたたみ椅子の一日の彼岸かな



貴志尚子

紅梅や雨の水面に触れぬたる
何も彼も抱へてくれし春の山
花ぐもり焦げめつけたるにぎりめし
啓蟄や外してをりし貝ボタン
大皿に残つてゐたる春の月

久保東海司

眠り逝く末期に雪の降りつつむ
葬送の雪に嗚咽のまつはるを
竹の春金婚はやも過ぎにけり
病窓の明けて慣ひの巢立見て
膝冷えてくる花よりか月よりか

近藤きくえ

梅東風や阿弥陀ヶ峰に日の差して
囀のひかりこぼるる森に入る
春宵や酔の香の中にゐてしづか
山頂の春の氷柱と太陽と
下萌や野島断層まざまざと

近藤公子

人生は音楽さくら舞ひにけり
血の濃さは問題ならず柳絮とぶ
つくしんぼの見上ぐる空の果たてかな
啓蟄の雲に右手を挙げにけり
菜の花の風おほわだへ出でにけり

近藤紀子

春浅し森嘉の飛竜頭買うてをる
ふらここの揺れてゐるのかぬないのか
春愁や犬の寢息も降る雨も
春一番切藁飛ばしゆきにけり
逢魔が時さけて春耕早じまひ

近藤喜子

おはやうと暖かき声おいてゆく
やはらかき草より湧きてくる霞
春の野や心も顔も丸くなる
封印の解けし茅花の眩しさよ
妖精の群れ舞ふ花菜畑かな

槐集

高橋将夫選

時間にも色あり音のありて春
安城 近藤 公子

ひきがへる哲学のとき過しをる
金色にならむと蝶の舞ひにけり
大の字にゐて春の空歩みけり
仏生会鴉にことばかけにけり
自画像の並ぶ教室ヒヤシンス
枚方 谷村 幸子

黄檗の蛇腹天井春日さす
雉子啼くや木津の流れに長き橋
辛夷咲く梵字大きな持仏堂
盆梅や思へば父は死に上手
春月やわが一枚の影とある
闇でなく光にもなき朧かな
雨粒に我に返りし春の闇
月日貝直たてに向き合ふ夫とゐて
イエスノウのあはひにありし春日向

中野 京子

磯巾着地軸の傾斜など知らぬ
撰津 中田 禎子

末黒野にまあるく緑ありにけり
囀や火を待つてをる鶺鴒殿原
池に水戻つてゐたり巢立鳥
白バイの逃水抜けて行きにけり
海鳴りのはるかなものも春耕す
福井 久津見風牛

雁風呂や撞木しばらくゆれてぬし
受験子の鏡に顔を戻したる
春曉の水に沈みし仏具かな
ひやひやと彼岸の数珠をまさぐれり
藪騒のあたり明るき浮氷
枚方 近藤きくえ

手品師の虜となりし春の人
潮騒の朧夜にとけゐたりけり
オリーブの丘に佐保姫さやさやと
恐竜を見てきしやうに朧の夜

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

時間にも色あり音のありて春 近藤 公子
花吹雪の中で流れ去る花びらを見てると、まるで桃色の時間が過ぎて行くようだ。静寂の中で、腕時計の秒針が時を刻んでいる音が今にも聞えてきそうだ。掲句をみてそんな景を思い浮かべた。そもそも時間とは一体何なんだろうか。春の朧の中で、そんなことに思いをめぐらすのもまた一興。ところで、作品鑑賞の醍醐味は名鑑賞をすることではなく、句を楽しむことにあると思っている。そして、選句の楽しみはそんな作品に出会うことにある。

自画像の並ぶ教室ヒヤシンス 谷村 幸子
父兄参観などで小学校に行くと、教室の後ろによく生徒の絵がズラリと掲示してあった。作者が訪れた時は自画像。とても自画像といえるほどのしろものではなからうが、でも自分の顔のつもりで描いたのだから、自画像には違いない。ほほえましい。ヒヤシンスの花がとてもすがすがしい。

イエスノウのあはひにありし春日向 中野 京子
世の中にはイエスとノウがはっきりしないことが多い。はっきりした方がよいけれど、しない方がよい場合もある。なるほど、春日向とはそんなものなのか。ところで、私もはっきりした結論が出ないで、もどかし思いをしたことは何度もある。今、作者も結論の出ない問題を抱えて春日向に居るのかもしれない。だいたいは話はそのが、大事なことはそれらしい理屈はつけても、

大抵は勘で決まるような気がする。将棋の名人でさえ、序盤・中盤で長考しても、最後の詰までは読めていないのだから。

磯巾着地軸の傾斜など知らぬ 中田 禎子
地軸は傾斜しているが、もとより実感はない。地球儀の軸が傾いているのを見て、ようやくそうらしいと思うくらいである。もし、磯巾着が傾いて岩に付着していたとしても、もとより地軸のかしぎとは無縁のこと。

海鳴りのはるかなものも春耕す 久津見風牛
春光を鋤き込み、春風を鋤き込んで春田を耕す。はるかなものへの思いもまた鋤き込む。はるかなたで海鳴りがしている。

藪騒のあたり明るき浮氷 近藤きくえ
少し騒がしいが、そのあたりは明るくて、氷が浮いている。なんとも心おだやかな景。

天邪鬼踏む草駄天の春愁 竹中 一花
草駄天はよく走る神として知られる仏法の守護神。踏まれている天邪鬼はさぞ悩んでいることと思うが、踏んでいる草駄天にも愁いがあるという。春の愁いだから、さしたることではないのだろうが。

ミモザ咲く哀楽となり合せなる 岩月優美子
悲しみがなければ楽しみはない。哀楽は表裏一体。香りのある黄色いミモザの花が哀楽の間を取り持っているようだ。

(以下略)